

大歳の火・仁多郡奥出雲町竹崎

令和2年11月10日掲載予定

収録・解説・酒井 董美^{ただよし} イラスト・福本 隆男



語り手 田和朝子さん（明治40年生まれ）
収録・昭和47年5月5日

あらすじ

昔あつたげな。あるところに旦那さんと女中さんといで、女中さんは新しく入ってきたばかりなので、大歳の晩になると、旦那は言ったげな。

「おまえに教えておくが、今夜は大歳なので、囲炉裏の火を消さないようによく埋めて寝なさい。明朝は、これで餅を煮るのだから」
「はい」

女中さんがよくよく火を埋めて寝、朝早く起きるとその火が消えてしまつてひとつもないげな。
「あら、困つたことをしたな、旦那さんがあれだけ言われたのに、こりやどうしたらいいだろうか」
戸口を開けて外へ出ると、下の方に火がポーツと見える。

「あら、あそこに火が見えるが、どこへ行くのだろうか、ここへ来れば火を分けてもらつて雑煮を作らねば」

待つていると、こちらの方へ来る。よく見ると葬式の行列のようだけれど、しかたがないので頼んだげな。
「なんとすみませんが、その火、ちいとばかし分けてござつしやいませんか」
「ああ、分けてあげるが、この棺桶を預かつてござれにやあげられん」
女中さんは困つたけれど、どうしようもないのでそれを預かり、白庭の隅に運んでムシロをかけておいたげな。

朝、給仕していても女中さんの顔色が非常に悪いので、旦那さんが、
「おまえはえらい顔色が悪いが、なしてだい」と尋ねると、女中さんもしかたなくそのわけを話したげな。旦那さんは、
「いや、そげなことだつたか。ほんなら二人して担つて捨てちやらこい」と言われるので、担い棒をかけて女中さんが持ち上げるとひよこり上がる。けれども旦那さんが担おうとするど重くてとても上がらない。

「まあ、こら、とてもいけんわ。蓋はぐつて見ちやらこい」
「それもようございませう」

https://kanbenosato.com/minwa/kancho_200701.html



それから棺桶の蓋を開けてみると、白金がいっぱい入つていただけだげな。
「いや、こりやあ、おまえは福の神さんだ。わしが女房になつていせ」
とうとう女中さんはその奥さんになつたげな。

解説

この話は本格昔話の「大歳の客」の中にある「大歳の火」として全国的にもよく知られている。
大晦日の夜は寝るものではなく、また、囲炉裏の火は消さずに新年に持ち越すこととが、継続の意味を示すことから、一家繁栄に通ずるとされていた。この話は以上のような風習を背景にして成立している。

また女中（お手伝いさんのこと）が棺桶と思つたその桶は、実は正月の床に飾るべき年桶だったのである。正月の神が女中の心を試し、彼女が火を再生しようと努力した勇氣を讃え、幸せを授けたという話である。

（元島根大学法文学部教授）